東国文化自由研究レポート

研究テーマ

古墳の終焉と総社の繁栄

～終末期古墳から考える総社町～

伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

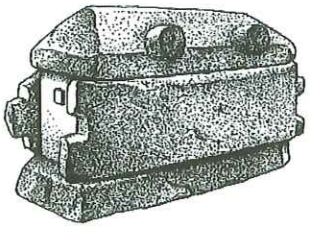
1年　1組　2番

氏名 秋田 優菜

（返却希望）

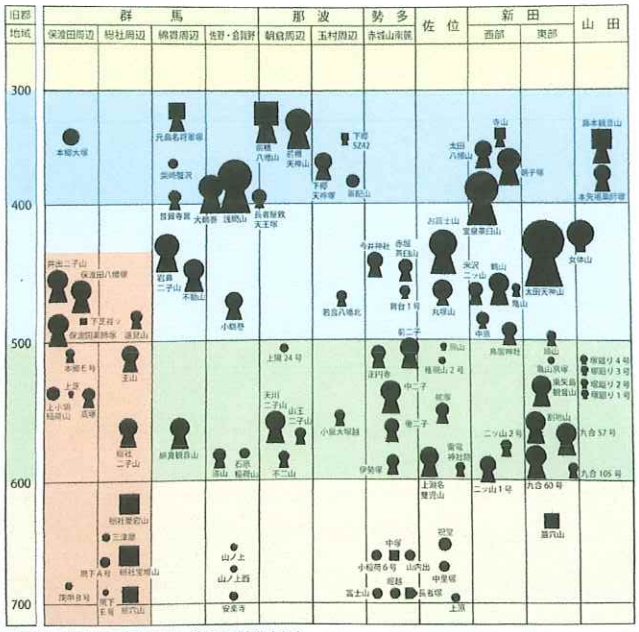
1　はじめに

古墳時代、群馬県周辺地域は東日本随一の大国「上野毛国」として栄えていた。当時の日本の中心地が近畿地方であったのにもかかわらず、大仙古墳にも用いられた最高位の石棺、長持形石棺(図Ⅰ)を持つお富士山古墳や太田天神山古墳があり、大きな力をもった権力者がいたことがわかる。図Ⅱから分かるように、群馬全域に大小さまざま形の古墳が、四世紀初頭から七世紀末までのおよそ四百年間もの間作られ続けてきた。特に四世紀末から五世紀中頃程までの約半世紀間は、墳丘全長１００メートルを超える古墳の中でも特に大規模な２００メートル程にも及ぶものが作られるなど、東国文化がより栄えた時期といえるだろう。



（図Ⅰ）

今回、このような古墳時代に栄えた関東地域周辺の文化である「東国文化」について研究するにあたり、特に私が興味を持ったのは、古墳の形や石室だった。古墳の形には、最もメジャーなものであれば、前方後円墳、その他にも円墳や方墳、前方後方墳、帆立貝形古墳など様々なものがある(図Ⅲ)。石室にも竪穴式石室や横穴式石室など種類がある。このような共通点や相違点に注目し、これから研究をしていきたいと思う。



群馬県中央部の古墳変遷図(雄山閣　全国古墳編年集成より)

図Ⅱ

図Ⅲ

2　テーマの設定

調べてみると、古墳の形は年代によって変化があるらしい。そこで、群馬県周辺の古墳の形状の移り変わりについて、「雄山閣　全国古墳編年集成」を基にした「赤城山南麓の古墳」の資料を参考にまとめてみた(図Ⅳ)。

(図Ⅳ)

図から考えると、円墳は、古墳時代のすべての年代で作られており、前方後円墳は6世紀末期にまで作られていたが、その後は作られなくなっている。また、前方後方墳や帆立貝形古墳などは、古墳時代前半から中頃までの一時期にのみ作られたことがわかる。方墳は5世紀前半の一部の時期と7世紀以降に多く作られたことがわかる。

図Ⅲと図Ⅳを合わせて考えると、7世紀以降から後半に規模の大きい古墳が多く作られたのは総社町のみである。図Ⅱからは、総社町に古墳が作られ始めたのは、他地域と比べると遅いことがわかる。さらに年代が進むごとに古墳の規模も大きくなっていっている。

このことから、私は今回の研究で総社古墳群について調べたいと思った。

3　調査

Ⅰ．計画

まず、調査方法としては、インターネットによる検索、書籍による情報収集、実地調査をすることにした。インターネット上の情報は、１０ページの参考文献欄のものを使用し、書籍は群馬県立図書館所蔵の書籍４冊(参考文献欄に記載)を使用した。

《実地調査》

私が、実地調査の場所に選んだのは、総社古墳群(そうじゃこふんぐん)のうち、遠見山古墳(とおみやまこふん)、総社二子山古墳(そうじゃふたごやまこふん)、愛宕山古墳(あたごやまこふん)、宝塔山古墳(ほうとうさんこふん)、蛇穴山古墳(じゃけつざんこふん)と大室古墳群(おおむろこふんぐん)のうち、前・中・後・小二子古墳だ。この調査計画の最後に基本情報をまとめておく。

各古墳で調査することは次の５つだ。

① 古墳の全体の形や墳丘の様子

② 石室内部の様子(石室見学の可能な古墳のみ)

③ (②に関連して)石室の壁などの石材の様子

④ 石室の形式と違い

⑤ 実際の様子を写真に撮ってくる(基本情報下の写真は実地調査の際の写真)

調査実施日は２０２２年８月７日に設定した。２ページの計画に加え、宝塔山古墳、蛇穴山古墳の付近にある「前橋市総社歴史資料館」と前・中・後・小二子古墳のある大室公園内の「大室はにわ館」にもいくことにした。

総社古墳群	住所	墳丘全長	石室	形状
遠見山古墳	前橋市総社町総社１３８６－２	８８メートル	竪穴式石室	前方後円墳
総社二子山古墳	前橋市総社町植野３６８	９０メートル超	両袖形横穴式石室	前方後円墳
愛宕山古墳	前橋市総社町総社１７６３	５６メートル(推定)	横穴式石室	方墳
宝塔山古墳	前橋市総社町総社１６０６	６６メートル	横穴式石室	方墳
蛇穴山古墳	前橋市総社町総社１５８７－２	４４メートル	横穴式石室	方墳
大室古墳群	住所	墳丘全長	石室	形状
前二子古墳	前橋市西大室町２５４５	９４メートル	両袖形横穴式石室	前方後円墳
中二子古墳	上に同じ	１１１メートル	横穴式石室？	前方後円墳
後二子古墳	上に同じ	８５メートル	両袖形横穴式石室	前方後円墳
小二子古墳	上に同じ	３８メートル	袖無形横穴式石室	前方後円墳

※大室古墳群の住所は大室公園の住所

総社古墳群

蛇穴山古墳

南から

宝塔山古墳

南西より一部分

愛宕山古墳

北から

※写真は２０２２年８月７日実地調査時のもの。

大室古墳群

前二子古墳

北から

中二子古墳

南東から後円部一部分

後二子古墳

南から後円部石室前墓道

小二子古墳

南から後円部

Ⅱ．結果

次に、各古墳を調査した結果について、ここにまとめていきたいと思う。順番は調査した順である。

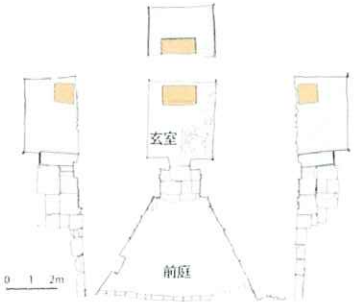
蛇穴山古墳　７世紀後半

① 規模はそれほど大きくない方墳で、前庭部(図Ⅴ)があった。

② 羨道がなく、開口部分すぐ後に玄室があった(図Ⅴ)。

③ 石室の壁や天井は一枚岩で作られていた(図Ⅵ)

④ 形式は横穴式石室。総社古墳群の中で唯一羨道がない。加工された大きな一枚岩で石室が作られている。石棺本体はなかったが、棺台となる切石が置かれていた(図Ⅵ下部)。



石室実測図

図Ⅴ

図Ⅵ

玄室奥壁

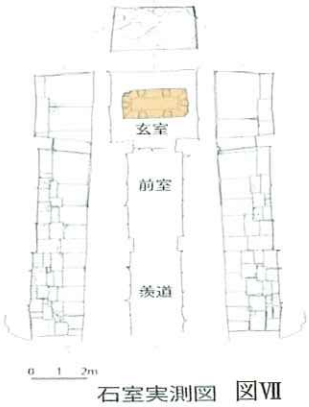
宝塔山古墳　７世紀中葉

① 墳丘長、墳丘の高さともに規模の大きな方墳だった(図Ⅶ)。

② 石室開口部分から玄室まで距離があり、玄室前に羨道と前室があった(図Ⅶ)。羨道と前室は壁からせり出した柱状の施設によって分けられていた(図Ⅷ)。

③ 壁は、３０センチメートルから６０メートル四方の加工された石材が組み合わされていた(図Ⅸ)。

④ 形式は横穴式石室。前室がある。石棺は家形石棺(図Ⅶ・Ⅷ)



石室実測図　図Ⅶ

図Ⅷ

図Ⅷ－Ⅱ

図Ⅸ

中央の石がほかの三つの石の形に合わせて削られている。宝塔山古墳から後の時代にみられる、截石切組積（きりいしきりくみづみ）というつくりになっている

愛宕山古墳　７世紀前半

この古墳は、石室調査ができず、全貌もよく見えなかったため、資料Ⅰ「東国の雄　総社古墳群」を参考にまとめた。

① 墳丘自体に木々が生えてしまい、古墳の全貌を見ることはできなかった(図ｘ)。資料によると、墳丘長５６メートルの総社古墳群の中では、宝塔山古墳に次ぐ規模の大きな古墳(図ｘ－Ⅱ)だそうだ。

② 開口部分が狭く、石室内に入ることはできなかった(図ｘｉ)。図ｘⅱの石室実測図をみると、羨道の奥に前室のあるつくりから、宝塔山古墳に似たつくりといえる。

③ 宝塔山、蛇穴山古墳と違い、壁が平らになっていない(図ｘⅲ)。自然石が一部のみ加工されている。

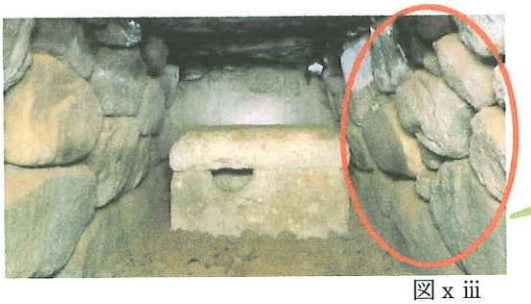
④ 形式は横穴式石室。石棺の形は家形石棺。

図ｘ

図ｘ－Ⅱ

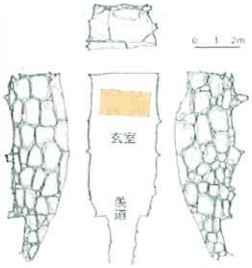
図ｘｉ

図ｘ実地調査⑤愛宕山古墳北から　図ｘ－Ⅱ資料Ⅰから愛宕山古墳上空



図ｘⅲ

自然石の一部が削られ、組み合わされている。



図ｘⅱ

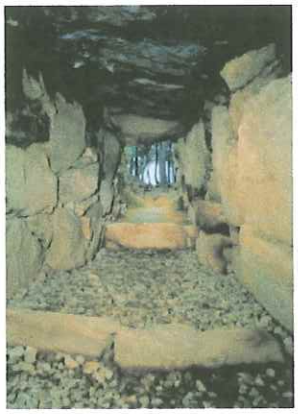
後二子古墳　六世紀後半

① 前方後円墳。規模は１００メートルに満たないほど。

② 石室内部の羨道は短く、段差があった(図ｘｉｖ)。

③ 愛宕山古墳や宝塔山古墳に使われていた石材より大きな石材が組み合わされていた。加工はされていそうだったが、石のサイズに統一感はなかった(図ｘｉｖ)。

④ 形式は横穴式石室。



図ｘｉｖ

図ｘｉｖ－Ⅱ

図ｘｖ

図ｘｉｖ：資料Ⅱ「～赤城南麓の大豪族の威勢～前橋市大室古墳群」より

横穴式石室と竪穴式石室

○竪穴式石室

３世紀半ばから５世紀後半にまで作られた。一度石室を閉じるとあけることができないため、一人を埋葬するために作られた。

墳丘の頂上に穴をほり、棺を入れて周囲を石で囲う埋葬方法。

《代表例》

森将軍塚古墳(長野県千曲市)

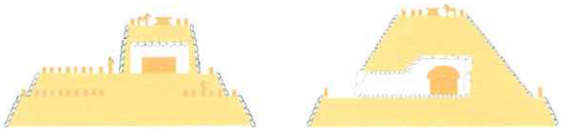
○横穴式石室

４世紀末から作られ始めた。入り口をふさいだ石や土を取り除けば、何度でも出入りすることができる。そのため、長く何世代にもわたって使われることもあった。

古墳の築造後に石室や羨道を掘り、棺などを搬入した。

《代表例》

石舞台古墳(奈良県高市郡明日香村)



4　考察

仮説①

地理的に古墳が作りやすかったのではないか？

仮説②

歴史的な要因があったのではないか？

調べたことから私は上の二つの仮説を立てた。このように考えた理由は、

仮説①

もともと古墳時代に群馬県が栄えたのは地理的要因があったから(図ｘｖｉ)。

仮説②

群馬県周辺はヤマト王権とのつながりが強く、近畿地方の影響を受けやすいと予想できる。そのため、少なからず近畿地方での出来事の影響が出るのではないかと考えたから(図ｘｖｉ)。

古墳時代を中心に、現在の関東地方で栄えた文化を「東国文化」といいます。

当時の日本列島は近畿地方が政治・経済・文化の中心地でしたが、その頃の群馬は、ヤマト王権が列島統一のために最も重視した東国の地域で、東日本をリードする先進地域へと成長しました。

群馬が重視された背景には、地理的な優位性がありました。馬による交通が発達し始めた古墳時代、群馬は日本列島の西と東をつなぐ交通の要となります。こうして、ヤマト王権と強く結ばれた群馬には、東アジアの先進技術や文化がいち早く伝来しました。新たに国宝となった綿貫観音山古墳のきらびやかな副葬品の数々も、その交流を示す貴重な文化財です。

また、群馬は、かつて13,000基を超える古墳が存在した「東日本最大の古墳県」であり、埴輪として日本初の国宝となった武人埴輪をはじめ、質・量ともに日本一の「埴輪王国」でもあります。近年、世紀の大発見と言われた「甲を着た古墳人」の発掘などにより、世界的にも希少な「榛名山噴火関連遺跡」も注目を集めています。

資料Ⅲ「東国文化副読本」より引用　　図ｘｖｉ

まずは仮説①について考えていきたいと思う。

古墳時代の末期に作られた古墳のことを**終末期古墳**という。古墳時代も後期(６世紀頃)になると大きな古墳は作られなくなり、古墳は小型化した。群馬県内に作られた終末期古墳は、方墳と円墳のみでその中でも規模の大きい古墳は総社古墳群に集中している。

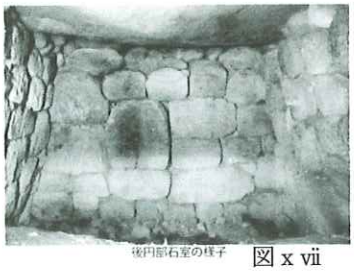
群馬県内の終末期古墳の墳丘長トップ５(７世紀以降に作られた古墳)

1	宝塔山古墳	前橋市総社町	６６メートル	7世紀中頃
2	愛宕山古墳	前橋市総社町	５６メートル	7世紀前半
3	蛇穴山古墳	前橋市総社町	４４メートル	7世紀後半
4	中塚古墳	桐生市新里町	３７メートル	7世紀ごろ
5	巌穴山古墳	太田市東今泉町	３６.５メートル	7世紀中頃

資料ｘviにもあるように、群馬はヤマト王権と強いつながりを持つことで栄えた。群馬には地形的に西日本と東日本をつなぐ交通の要となる位置にあったことがヤマト王権とのつながるきっかけとなったそうだ。群馬の古墳から出土した埴輪などの中には近畿地方で作られたものもあるほどだ。しかし、埴輪や副葬品などの軽いものは当時の運送技術でなんとか運ぶことができただろう。ただ、調査の際に見かけた古墳の石室を作り出すあの大きな石。あれを500キロ近い距離のある近畿地方から群馬まで運ぶのは不可能だろう。(現在の整備された道でも車で7時間かかる)

つまり、近くで材料を調達しやすいほうが古墳を作りやすいということだ。当時の日本の中心地は近畿地方。そこから遠く離れた群馬は自力で材料を得るしかない。

たとえば、総社二子山古墳。今回は残念ながら後円部石室の天井の崩落により中に入ることはできなかったが、資料が手に入った(図ｘvii)。


後円部石室の様子

図ｘvii

この石室には、榛名山から噴出した、角閃石安山岩(かくせんせきあんざんがん)が使われている。

また、愛宕山古墳の刳抜式家形石棺(くりぬきしきいえがたせっかん)は、凝灰岩(ぎょうかいがん)でできている。凝灰岩とは火山灰などが固まってできた堆積岩(たいせきがん)の一種である。これも加工しやすい石らしい。

○角閃石安山岩とは？

弥生時代に石器として使われていたやわらかい石。
火成岩の一種。やわらかいため加工しやすく、同年代に作られたと考えられている天然石の前方部石室と比べると、安山岩の後円部石室のほうが、加工の精度が高いことがわかる。

前方部石室の様子

前方部石室の様子

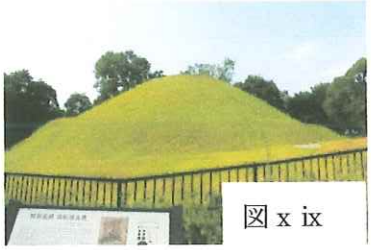
宝塔山古墳の刳抜式家形石棺に使われているのも輝石安山岩という火成岩の一種だ。
このように総社古墳群だけでもあらゆる部分に火山があることによってできる石材を使っていることがわかる。

もしかしたら、東国文化が栄えたのは周辺に多くの火山があったからかもしれない(図ｘviii)。群馬はヤマト王権と強いつながりを持った上に、豊富な材料が周辺に多くあった為、多くの古墳が作られたのだと思う。

図ｘviii

次は、仮説②について考えていこうと思う。
群馬県総社町にはなぜ古墳時代終末期になってから多くの古墳が作られたのだろうか。終末期古墳の代表例といえば彩色壁画の見つかった奈良県明日香村の高松塚古墳や

彩色壁画の見つかった奈良県明日香村の高松塚古墳や
キトラ古墳だろう。しかし、規模でいえば高松塚古墳(円墳、7 世紀末～8 世紀初頭、図ｘix)は直径２３メートル、キトラ古墳(円墳、7 世紀末～8 世紀初頭、図ｘix－Ⅱ)は直径１３．８メートルの中、総社古墳群のなかで最後に作られた蛇穴山古墳(方墳、7 世紀末)は一辺４４メートルの規模がある。確かに築造されたのは少し早いが、それだけでここまでの差が出るだろうか。


図ｘix

図ｘix－Ⅱ

調べてみると、終末期古墳というのは、古墳がほとんど作られなくなった時期に一部の支配者たちがまれに築いたものらしい。

結論をいうと、群馬の終末期古墳に比べて近畿・関西地方の終末期古墳の規模が小さいのは、大化の改新の際に打ち出された「公地・公民制」などにより、各地の豪族、支配者たちの力が弱まったからで、政治の中心地となった奈良県では、権力者はいるものの、その改新の影響が強かったのではないかと考えた。また、なぜそのような規模の大きな終末期古墳が総社に作られたのか。それは、国府が置かれたからだと考えられている。国府とは奈良時代に地方に派遣された国司が政務(政治に関する事務)を行う施設のことだ。国府は中央(政治の中心地)により決定され、駅伝制※に基づきその国を統治するのに便利な場所に置かれた。

図ＸＸから分かるように総社町は群馬県内の低地のほぼ中央にある。総社町周辺は古墳時代末期には後に国府に選ばれるほど交通の便が良かったのだろう。そして、その結果、群馬県全域から古墳に使われる質の良い石材が集まったのだと思う。

総社町

・・0 図ｘｘ

※駅伝制：国の中心から辺境へとのびる道路に沿い、人・馬・車などを常備した施設を適切な間隔で置き、

5　結論

総社の終末期古墳が他地域に比べ規模が大きいのには次の要因がある。

○周辺地域、県内程の距離に石室や石棺の材料となる安山岩や凝灰岩などを生み出す火山が多くある。

○交通の便がよく、県内各地から質の良い石材が集まった。

○国府が置かれ、権力者が集まった。

○近畿地方より大化の改新の影響を受けにくかった。　　など

多くの理由があることがわかった。

《参考文献》

○東国文化副読本 2022 年度版　https://hani-gunma.jp/2021gunmatougoku/top.html

○東国の雄　総社古墳群　https://sitereports.nabunken.go.jp

○前橋市　大室古墳群　https://sitereports.nabunken.go.jp

○榛名山東南麓の古墳　https://sitereports.nabunken.go.jp

○広辞苑　https://sakura-paris.org/dict/広辞苑/content/14579_1052

○日本古代史つれづれブログ　https://aomatsu123.blog.fc2.com/blog-entry-184.html?sp

○goo 辞書　https://dictionary.goo.ne.jp/word/古墳/

○地層科学研究所　https://www.geolab.jp/science/2018/10/science-095.php

○駅伝制 - Google Arts & Culture
https://artsandculture.google.com/entity/g121_51sh?hl=ja

○群馬県地図　https://www.mapion.co.jp/smp/map/admi10.html

●群馬の古墳物語上　右島和夫　著

●群馬の古墳物語下　右島和夫　著

●もっと知りたい！上野三碑　松田猛　著

●群馬古墳探訪　群馬県